

2020 東京パラリンピック 陸上競技 ～『チームびわこ』の挑戦～

石井田 茂夫¹⁾

Team Biwako's Achievements in Athletics at the 2020 Tokyo Paralympics

Shigeo ISHIDA

Key Words : 2020 Tokyo Paralympics Athletics, the COVID-19 pandemic, team Biwako, Paralympic Village, F46-upright-position Javelin throw

キーワード：東京パラ陸上，コロナ禍，チームびわこ，選手村，F46 立位やり投げ

1. 「同じ障害を持つ子供たちに夢を」

本学へ赴任前の2016年、日本パラ陸上競技連盟強化委員会より、2020東京パラリンピックに向けての強化アドバイザーとして招聘を受けました。課せられた務めは、世界との差が大きくて代表権を得るのが困難な投てき種目を強化し、東京パラリンピックに代表選手を出すことです。ターゲット種目は、F46男子やり投げ【立位・上肢障害※切断・運動機能障害】。強化選手は、東京パラ陸上競技に向けてのトライアウトで野球から転向して2年目の山崎晃裕選手と育成選手として、短距離・砲丸投から転向の白砂匠庸選手。この二人を中心に数名の選手とコーチングスタッフへの指導を任されることになりました。陸上競技経験が浅く、偏った練習知識しかない選手たち。指導経験が浅く計画性が見えないコーチ陣。しかし、心強かったことは、全てのメンバーが「同じ障害を持つ子供たちに夢を与えたい」という気持ちをもって競技に取り組んでいることでした。当初、びわこ

成蹊スポーツ大学赴任初年度と重なり、「大変な時期に強化を引き受けた」「大学陸上競技部の成果が上がらずどっちつかずになっただろうしよう」という不安も、選手・コーチ陣の純粋な気持ちにかき消されて、チームで切磋琢磨して「必ず代表を送り出そう」「両立するのだ」という強い決意に変わっていききました。

2. パラ陸上競技の特徴

パラ陸上競技の場合、国際大会時に実施されるクラス分けの関係で（障害の審査により出場するクラスが決まる。）海外遠征での国際大会でデビューすることがほとんどです。多くの選手が、競技キャリアが浅いのにいきなりJAPANのユニホームで国際試合に出るのです。海外の試合に出場する機会が多いことは選手が競技に力を入れる動機向上の一端になっていますが、一方で十分な研修ができていないまま、パラ陸上をスタートしていることも事実です。また、強化

1) 入試本部 入試部

選手・育成選手になれば合宿において HPSC (ハイパフォーマンスセンター) という恵まれた環境で合宿ができます。

3. 強化アドバイザーとしてスタート

2017年GW期間にHPSCで実施された強化・育成選手の合宿に初めて参加しました。選手だけでなく、コーチ・トレーナーのスタッフに対しても強化に対しての具体的な計画と実行の仕方を提示し、グラウンドでは各選手それぞれの身体的特徴を明確にしていきました。

その後、7月の世界パラ陸上(ロンドン)に出場を決めていた山崎選手が本学に練習に行きたいと連絡してきました。1年目で54mの日本記録を樹立したもののその後低迷していた山崎選手には強い決意があったのでしょう。自費での、マンツーマン調整練習希望です。当時大学生だった山崎選手は、本学部員とも交流して数日後ロンドンに出発し、見事5位入賞(54m)を果たしました。これがその後の『びわこ合宿』『チームびわこ』のきっかけになりました。さらに、山崎選手



写真2 びわこ合宿 第1回 (2017.8)

は、2018年アジアパラ陸上(インドネシア)においても5位入賞。そして2019年の世界パラ陸上(ドバイ)では、元甲子園球児で大学生高橋峻也選手の台頭により下位ながら3名が入賞。毎年確実にチームとしてステップ



写真1 びわこ合宿 第1回 (2017.8)



写真3 アジアパラ陸上・インドネシア (2018.10)



写真4 アジアパラ陸上・インドネシア
(2018.10)

アップしていき、個人的にもジャパンチームとしても大きな経験を積みました。この間、パラ陸連の強化合宿と強化指定選手の個人合宿は2月の沖縄以外は全て本学を会場として実施しました。『チームびわこ』と名付けて、近江舞子の民宿を宿舎にしました。本学の陸上フィールドだけでなく、時には近江舞子の砂浜を走り、いろいろな大きさの石を琵琶湖に向かって投げたこともありました。そして



写真5 世界パラ・ドバイ (2019.11)



写真6 世界パラ・ドバイ (2019.11)



写真7 沖縄 国頭村合宿 (2020.1)
～地元の子もたちとのふれあい～

[比良とびあ] で入浴して心身を癒す。夏場は練習後に本学艇庫で琵琶湖に飛び込みました。

4. コロナ禍と東京オリ・パラ延期からの代表権獲得

順調に強化が進む中、その後のコロナ禍による厳しい状況は私たちにも例外でなく、選手たちはホームにおいて練習場の確保さえ難

しい日々を送りました。そんな中、2020 東京オリ・パラの1年延期が決定。代表権獲得への計画・準備の見直しに苦悩しました。もともとパラ五輪の出場資格は非常に厳しく、最終的に多くても世界ランキングの上位者10名程度です。皮肉なことに日本チームとして成長した3人が世界ランキングの上位層を押し上げることになり出場枠を仲間で争う状況になっていました。国際大会が開催されなかったことにより世界ランキングを安全圏に持っていく機会は2021年春の国内大会で決まる流れになってしまいました。本当に複雑な思いでしたが、ようやく迎えた2021年。3月までの成績で5月にまずは山崎選手が内定。さらに6月の最終代表選手選考で白砂選手が代表入りしました。二人とも60mスローワーに成長しての代表入りです。投てき競技の同クラス2名の代表は歴史的快挙です。しかし、その喜びもつかの間。大会本番に向け

ての万全な準備をしなければなりません。

5. 本番に向けての準備と対策 —バブル方式 合宿から選手村へ—

本番が目前に迫る中、彼らにはマスコミや地元の歓迎会などに関する対処の研修を行いました。しかし、二人の職場・地域・親戚の反響は想像以上に大きく、いつのまにか自分を見失っているように感じることも増えました。

本番までは2週間のHPSCでの合宿を実施。この期間は練習だけでなく毎日時間をかけてこの5年間の「ふりかえり」ミーティングを開きました。自分を見つめなおして本番で実力を発揮すること。実力以上の結果を求め自分のパフォーマンスを崩さないようにすることが目的です。口にこそ出していませんが、外国勢の上位選手とまだメダル争いができる実力に到達していないという判断です。私たち選手2名とコーチ2名の4名は、ルール通り3日前にパラリンピックの選手村に入りバブル生活になりました。合宿から選手村滞在の3週間は、抜き打ちのドーピング検査に備えて常に選手と共に行動していました。もちろん、PCR検査は合宿入り前から毎日実施です。選手村ではマンションの一室で私たち4名の同居でした。民宿のびわこ合宿を何度も繰り返してきたので家族のように過ごせてストレスも最小限に抑えられました。入村二日目、午後3時30分、私たち4人がリビングにおいて練習後の一息をついていたところに突然ドーピング検査員が現れ白砂選手が検査に向かいました。

ニュースで話題になっていた生活としては、段ボールベッド。シングルサイズで体の大きな人には気の毒を感じるものの非常に良くできた製品で災害時など緊急時に役立つと感じました。スポンサーから提供していただいた高価な寝具と合わせて寝心地は快適でした。

食事については、24時間サービスのメイ



写真8 びわスポ記録会(2021.7)

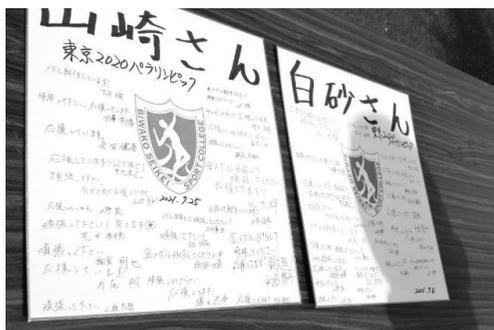


写真9 びわスポ記録会(2021.7)
激励の色紙



写真 10 東京パラ (2021.8)



写真 12 東京パラ (2021.8)



写真 11 東京パラ (2021.8)



写真 13 東京パラ (2021.8)

ンダイニングは700種類のあらゆる食文化のメニューが広大なフロアに用意されており、さらにカジュアルダイニングでは日本人自らの食文化を再認識することをテーマに日本の各地方の料理が楽しめました。

残念ながら、村内での国際交流はさすがに難しくどの国のチームも自国チームでの行動になっていたのは仕方ないところでした。

練習場のサブトラックでは全国から集まった知り合いの高校顧問の先生方がボランティ

ア役員の任務につかれており、多くの激励の言葉をいただきました。そこで、複数の方が口にされたのが、パラ陸上の選手はどの国もマナーが良いということでした。オリンピック時には各国チームが待機テントから離れた後にはゴミが散在していて大変だったようです。

常にボランティアの人たちから優しく声をかけていただき、本当に親切でした。皆さんの笑顔は、特に選手には心強かったと思いま



写真 14 東京パラ (2021.8)



写真 15 東京パラ (2021.8)

す。多くの選手がインタビューで彼らに対して感謝の気持ちを述べていました。

今大会で最も難しかったのは、やはり前述通り地元の東京パラリンピックという注目の中、マスコミの取材と世間の期待に選手たちが過度の目標を持つようになったことです。海外からは非公認試合で世界記録を上回る外国勢の活躍情報もありました。当日も、自分を見失わないようにするための打ち合わせ。自分の投てきをすることに集中すること。明るく元気に戦うことを確認しながら試合に送



写真 16 東京パラ (2021.8)

り出しました。

6. 試合本番—貴重な経験—

選手紹介での彼らの明るく元気な姿は、これまでの大会で彼らを知るテレビ解説者が頼もしくなったと褒めていたようです。

投てき競技は3投目までのベスト記録を競い、8番目選手までが残りの3投試技に進めます。試合を組み立てるには1投目が最重要。その1投目を二人ともが見事に57mオーバーでスタートを切りました。これは両名共に大きな大会での1投目自己最高記録です。順調にスターして2投目次第では60mオーバーも期待できる仕上がりになっていました。しかし、2投目に入り彼らより先に試技をしたスリランカとインド選手が、立て続けに64mを超えるビッグアーチをかけて世界記録を更新し、関係者のみの会場にかかわらず場内にどよめきがおこりました。そしてここから歯車が狂いだします。直後の山崎選手は投げ急ぎ、そのあとの白砂選手は助走スピードが調整できず、コーチ席から我に戻れ



写真 17 6位入賞 白砂 匠庸 選手
一般社団法人 日本パラ陸上競技連盟 提供



写真 18 7位入賞 山崎 晃裕 選手
一般社団法人 日本パラ陸上競技連盟 提供

きたら悔しい思いが突然襲ってきたと聞きました。私が期待していた通りです。次のパリ・パラリンピックを目指して世界と戦うには、本当に悔しい気持ちが湧かなければ世界レベルの努力ができないと考えているからです。

私もこの5年間で新たな経験を積むことができました。思うようにいかない時は、多くの人からの激励に勇気をいただきました。

そして、何よりもこの事業の任務に快く送り出していただいている本学には本当に感謝しています。本学のアピールと本学学生の指導に少しでも生かすことができればという思いで、次の世界パラ陸上、パリ・パラリンピックに向けてこれからも選手たちと歩みたいと考えています。

2022年1月

るようにアドバイスを送りますが、あれだけ冷静に試合に入った元気な姿が、引きつった作り笑いをする姿に変貌して戻りません。その後も、二人は不本意な投てきを繰り返し記録を伸ばせず白砂選手6位、山崎選手7位という下位入賞という結果で戦いは終わりました。

7. 大会を終えて

試合を終えてチームテントに帰ってきた彼らは、予想外にさばさばとしていて悔しさよりも充実感に満ちている様子でした。まだやり投げ歴6年ほどの二人が地元東京パラの大きな重圧から解放されたひとときだと感じました。きっと彼らはこの経験を各地での講演などで語り継いでいくことでしょう。

その後、彼らから時間が経って落ち着いて